

# I 本研究の目的

部民制は、律令国家成立以前における全国的な支配体制のひとつで、技術者を含む様々な職掌集団を「部」として掌握した上で、王権への労役や生産物の貢納を課す制度とされる。従来は主に文献史学から研究が進められてきたが、当該期の史料的な限界もあり、その実像については不明な点も多い。本研究では、近年、飛躍的に深化している埴輪の生産・流通体制の復元研究に基づいて、考古学から部民制の実態を明らかにすることを目的とする。

古墳に樹立・配列される埴輪は、元来、飲食物供献や瘳邪といった古墳の葬送観念を具現化する象徴物である。一方で埴輪は、その製作に一定の技術を要し、かつ大量に生産・消費されることから、古墳時代の手工業生産の実態解明において恰好の資料とされてきた。研究代表者である筆者はこれまで、こうした特性を有する埴輪の研究を積み重ね、王権の膝下で始まった埴輪生産が徐々に発達を遂げ、日本列島各地へと伝播、定着していく過程を実証的に跡づけてきた。また、同工品・生産組織分析の手法も用いながら、王権中枢部の埴輪生産体制の復元にも取り組んできた（廣瀬2015）。

これまでの研究により、前・中期の王権を構成する奈良盆地・大阪平野の大型古墳群間では、①活発な工人移動を背景に、大きくは一つの様式として埴輪生産が展開したこと、②その上で、遅くとも4世紀中頃（前期後葉）には、特定の生産地から複数の消費地へと埴輪が一元的に供給される集約的な生産体制が出現すること、③そこでは、型的に類似度の高い製品を安定的に大量生産するために、個々の製作者を数人一組で小グループに編成した上で、それらをいくつも束ねて全体の統制が図られていること、④5世紀代（中期前葉以降）の王陵周辺の埴輪生産でも、そうした重層的な工人編成システムが機能し続けたこと、などを明らかにしてきた。5世紀代の王陵周辺では、一度に数千、数万にもおよぶ埴輪が必要とされたにも関わらず、製品の細部にまで統制や管理が行き届いているが、その背景には、上記のような集約的な埴輪生産体制が存在したと考えられる。

これに対して、6世紀代（後期）の埴輪生産に関しては、筆者自身の研究はもとより、先行研究においても、その実態が十分解明されているとはいえない状況にある。古墳時代後期の「畿内」では、継体大王擁立に象徴される王統の混乱、埴輪樹立古墳の増加を受けた需要の拡大、拠点的生産地の並立などを反映して、埴輪生産は複雑な様相を呈するに至る。当該期の「畿内」の埴輪生産については、系統の識別や生産・供給関係の解明など、基礎的な部分においても課題が多く積み残されているのが現状といえる。

一方で文献史学では、中央や各地の豪族を介して各種技術者や職務分担者が「部」として掌握され、王権への労役の提供や生産物の貢納が課される部民制が、まさに6世紀に成立したとされる。6世紀の王権中枢部における複雑な埴輪の様相は、この部民制を何らかの形で反映した結果であることが予想される。部民制に関する研究は、従来、文献史学を中心に進められてきたが、『記』『紀』や金石文の断片的な記述からその具体像を追究するには自ずと限界もある。これに対して、近年、埴輪の同工品論や生産組織の復元研究は飛躍的に深化してきており、この手法を通じて当該期の労働編成のあり方を実証的

## I 本研究の目的

に追究できる埴輪研究は、考古学から部民制の実像に迫り得る唯一の研究分野と言っても過言ではない。

埴輪研究から部民制の実態にアプローチする方向性自体は決して目新しいものではない。石母田正が早くに唯物史観にもとづいてその先鞭をつけ（石母田1955）、その後の埴輪研究の進展のなかでも絶えずその関係性が追究されてきた。とりわけ関東地方の埴輪研究では、埴輪生産に関する豊富な研究蓄積をもとに部民制の構造との整合化が図られ、有益な議論が展開されてきている（車崎2004）。しかしながら、6世紀代の「畿内」の埴輪研究は、系統識別自体が容易ではないこともあり、生産・流通体制を論じるための基本的枠組みすら未確立な状態にあるといえる。

本研究ではそうした研究の現状を踏まえ、まず、後期の円筒埴輪、すなわちV群円筒埴輪の内容をその成立過程にまでさかのぼって再検討し、中期から後期へ至る生産体制の変化、およびそれに付随する系統分化のあり方を奈良盆地の状況にもとづいて詳しく整理する。さらには古墳の築造状況や隣接地域との関係も踏まえながら、生産・供給体制や製品流通の実態、工人の労働編成や移動形態を追究することで、王権中枢部における後期の埴輪生産体制の特質を明らかにしたいと考える。

部民制は、王権やその周辺のみならず、地方の豪族やその傘下の集団をも巻き込んだ全国的な職務分掌組織とされるが、埴輪生産からその実像にアプローチする上で、当初から広範な地域を対象とすると、議論が浅薄となることが憂慮される。むしろ本研究では、6世紀代の王権の中核域であった奈良盆地とその周辺地域にフィールドを絞って議論することで、埴輪生産における部民制的構造の一端を詳しく掘り下げることを目標とする。